

令和7年度 研究推進計画

学 校 名 東広島市立河内小学校
校 長 大 星 篤 志
学 校 名 東広島市立河内中学校
校 長 三 谷 晶 子

1 研究主題、研究内容・方法等について

①研究主題

**ゴールに向かって主体的に学び続ける児童生徒の育成
～「問いを創る授業」の手法を活用した課題発見・解決学習を通して～**

②主題設定の理由

【昨年度の取組、成果と課題】

今年度、本小中学校では研究主題を「ゴールに向かって主体的に学び続ける児童生徒の育成～『問いを創る授業』の手法を活用した課題発見・解決学習を通して～」と設定した。主題設定理由は以下の通りである。

昨年度、本小中学校は東広島市教育推進指定校の指定を受け、「自分の考えを進んで表現する児童生徒の育成～『問いを創る授業』の手法を活用した課題発見・解決学習を通して～」と設定し、小学校では算数科、中学校では全教科で研究を行い、授業公開を行った。立正大学・鹿嶋真弓教授のご指導をいただき、「問いを創る授業」に取り組むことで、児童生徒の「なぜ」「どうして」を引き出し、表現しようとする意欲を高めようとした。その結果、次のような成果・課題が見られた。

<成果>

○表現しようとする意欲が高まった。【本小中学校児童生徒アンケートより】

- ・「自分の考えを進んで発表している」 小学校 85.9%→96.6%
- ・「発表することは楽しい」 小学校 87.5%→98.3% 中学校 55.4%→72.2%
- ・「問いを創ると考えたことを発言しやすい」 中学校 53.8%→77.2%

○指導者の授業意識の向上がみられた。【本小中学校教職員アンケートより】

- ・「児童生徒の学習事項の修得につながるような「問いを創る授業」を実践している。」
小中教職員 70.4%→100%
- ・「児童生徒の主体的な表現につながるような『問いを創る授業』を実践している。」
小中教職員 64.7%→100%

○学力が向上した。【各種学力調査より】

小学校：標準学力調査標準スコア 50以上の学年 昨年度2学年→今年度4学年
中学校：5教科確認テスト平均点 3年1回目県平均-20.7点→4回目県平均+9.5点

<課題>

- 「問いを創る授業」の取組と、児童生徒の表現しようとする意欲に相関関係が見られたとはいえない。【本小中学校児童生徒アンケートより】
→意欲の向上が見られた時期と下降する時期があった。
- 9年間で学年ごとに付けたい表現力を設定したが、活用するまでには至っておらず、表現力を付けるための焦点化した研究が十分に行えなかった。

成果と課題を分析すると、児童が問いを創り伝える場面を指導者が仕組むことにより、自分の考えを相手に伝わるように表現しようとする児童生徒が増えたことが窺える。その結果、学力も伸びていると言える。

一方で、全体的には表現しようとする意欲は高まったものの、意欲が向上する時期とそうでない時期がはっきりしており、「問いを創る授業」の取組をすればするほど児童生徒の意欲が向上したとは言えない。

い。これは、児童生徒が創った問いを授業・単元のねらいに向けて指導者が十分に生かし切れず、学習意欲の向上につなげられなかったことが原因と考える。また、取組み始めて1年であり、「問いを創る授業」を十分に理解し実践ができていないと言えない。指導者は、児童生徒の変化の手ごたえを感じており、継続して実践を積み重ねていきたいと考えている。

【本小中学校の現状】

本小中学校は児童数 52 名・生徒数 93 名の小規模校である。特に小学校は年々児童数が減少しており、複式学級が生じる可能性がある。中学校では学習や行事、特別活動等において目標（ゴール）設定することが難しいため、各活動に主体的に取り組むことができず、達成感を感じにくい生徒もいる。これからの変化の激しい社会をたくましく生きるためには、ゴールを意識し、様々な方法によって主体的に学び続け、課題を解決する力をさらに付けていくことが重要である。

以上の課題及び現状を踏まえ、「問いを創る授業」の手法を活用し、ゴールの達成に向けて児童生徒が問い続け学び続けることによって、主体性を高められることが必要だと考えた。

【主題に迫る手立て】

「ゴールに向かって主体的に学び続ける児童生徒」を育成するために、授業では、昨年度に引き続き「問いを創る授業」の手法を活用した課題発見・解決学習に取り組み、主体性を高め、学力を向上させる。「問いを創る授業」とは、「問い」を思い浮かべるための手がかりとなる「不思議のタネ」を提示し、児童生徒自身の中からわき上がってきた疑問を「問い」にしてそれを解決していく授業である。単元の第一時等にこの手法を活用し、課題を解決していく過程で、主体的に自分の考えを表現できる場面を仕組んでいくようにする。昨年度課題であった、授業者が児童生徒の「問い」を授業・単元内でどのように活用するかという点と、問いを立てる力をどう付けていくか、研究を深めていく。また、単元全体のゴールや「不思議のタネ」、学び方等を示した「ビジョンシート」を作成し、児童生徒と共有しながら学習を進める。小学校では、引き続き算数科の「問いを創る授業」に取り組む。加えて、児童の主体性をより一層高めるとともに、複式学級での授業を想定するため、児童が中心となり授業を進めるための学習ガイドの作成やその実践に取り組む。中学校でも、引き続き全教科で「問いを創る授業」に取り組む。また、生徒が単元のゴールを意識しやすいように単元の流れを見通せるシートを作成したり、1時間の授業の流れを提示したりするなどの視覚支援を充実させるなど授業の構造化を図り、生徒が主体的に取り組める仕組みをつくっていく。

これらを通して、学校教育目標『夢と志』をもち、未来に向かって果敢に挑戦する児童生徒の育成をめざす。

③研究仮説

指導者・児童生徒が授業のビジョンを共有し、「問いを創る授業」の手法を活用した課題発見・解決学習を仕組むことで、児童生徒はゴールに向かって主体的に学び続けることができるであろう。

④研究内容

（１）授業改善の推進

- ・「問いを創る授業」の実践
- ・指導者・児童生徒が単元を見通せる「ビジョンシート」の作成・活用
- ・ICT機器のより一層の活用
- ・授業研究における小中学校教員の相互参観、研究協議

(2) ゴールやプロセス、振り返りを意識した家庭学習の工夫

⑤検証の方法及び指標

- ・児童生徒・指導者アンケート 肯定的評価 85%以上
- ・研究授業でのルーブリック評価 B評価 80%以上
- ・各種テスト（小：単元末テスト、中：確認テスト） 昨年度の数値以上

2 検証計画

- ・児童生徒アンケート（児童生徒・指導者）…計4回（4月・7月・10月・12月）
- ・授業研究、協議会の実施（小中全教職員）…4～11月
- ・各種テスト…随時

3 校内研修計画

実施予定月	研究（研修）内容	担当者	備考
年2回 通年・随時	・学校評価①②結果の伝達 ・児童理解研修(特別支援・生徒指導) ・ICT研修 ・小中研究主任連携	校長・教頭・教務主任 特別支援教育Co・生徒指導主事 情報教育担当 研究主任	
年4回	・児童生徒・教職員アンケート (実施→集計・分析)	教頭・教務主任・研究主任	
年2回	・各種テストの結果分析	各担任	
4月	・教育課程について ・授業での学習規律等共通理解 ・研究主題・内容・計画について ・学習指導案の作成について	教務主任 教務主任・研究主任・生徒指導主事 研究主任 研究主任	
5月	・授業づくり、学級づくり研修	講師(立正大学・鹿嶋真弓教授)	
5～7月	・授業研究	授業者	授業研究の内容
8月	・授業づくり研修	講師(立正大学・鹿嶋真弓教授)、	・指導案検討 ・模擬授業
9～11月	・授業研究	授業者	・授業
12月	・授業のまとめ作成(研究紀要)	研究主任・授業者	・協議
1月	・研究の成果と課題の分析(研究紀要まとめ)	研究主任・全教職員	・まとめ文書作成
2月	・来年度に向けての計画立案	教務主任・研究主任	

4 研究公開の予定について

特になし

令和7年度 東広島市立河内小・中学校 研究構想図

【児童生徒の実態】

- ・個々の活躍の場を多く設定したりして、様々な取組に挑戦しやすい環境にある。
- ・小学校では年々児童数が減少している。中学校では学習や行事、特別活動等において目標設定をすることが難しいため、各活動に主体的に取り組むことができず、達成感を感じにくい現状にある。

学校教育目標

「夢と志」をもち、未来に向かって
果敢に挑戦する児童生徒の育成

研究主題

ゴールに向かって主体的に学び続ける児童生徒の育成
～「問いを創る授業」の手法を活用した課題発見・解決学習を通して～

【研究仮説】

指導者・児童生徒が授業のビジョンを共有し、「問いを創る授業」の手法を活用した課題発見・解決学習を仕組むことで、児童生徒はゴールに向かって主体的に学び続けることができるであろう。

【研究内容】

(1) 授業改善の推進

- ・「問いを創る授業」の実践
- ・指導者・児童生徒が単元を見通せる「ビジョンシート」の作成・活用
- ・ICT機器のより一層の活用
- ・授業研究における小中学校教員の相互参観、研究協議

(2) ゴールやプロセス、振り返りを意識した家庭学習の工夫

【河内中学校区で目指す15歳の生徒像】

- ・自己を認識し、自分の人生を選択し、表現することができる生徒
- ・自他を尊重し、自ら考えて、よりよく行動できる生徒